練馬区立大泉中学校　　学校だより

# 中 大泉

「自律」
「協働」
「創造」

令和8年 11月2日
発行者 大槻　亨
編 集 本田 敏行

第7号

## これからもハーモニーを大切に

校 長 大槻 亨

爽やかな秋晴れのもと、去る 10 月 6 日（火）に開催いたしました合唱コンクールには、多くの保護者の皆様、ならびにご来賓の皆様にお越しいただき、生徒たちに温かい拍手を送っていただきましたこと、心より感謝申し上げます。会場の都合上、学年入れ替え制や入場人数の制限にご理解とご協力をいただきましたおかげで、安全かつ盛大に開催することができました。重ねて御礼申し上げます。

このコンクールに向け、生徒たちは限られた時間の中で主体的に練習を重ねてまいりました。本番の舞台では努力の成果を惜しみなく発揮してくれました。また、10 組の生徒たちも日頃の成果を存分に発揮し、ホール全体に温かくきれいな調和を響かせてくれました。

そして何より、最高学年として臨んだ３年生の学年合唱は、まさに圧倒される圧巻のパフォーマンスでした。中学校生活最後となる舞台で、３年生が一丸となって披露した堂々たる歌声と豊かな表現力は、聴く者すべての胸を強く打ちました。学年全体が一つとなってホールを包み込んだその圧巻の響きは、下級生にとっても目指すべき見事な模範であり、深く心に残る感動的な姿でした。

合唱において「ハーモニー」とは、「異なる音の重なりが美しく調和すること」を意味します。もし誰か一人が自分勝手に大声を出したり周りを無視したりすれば、美しい響きは生まれません。美しいハーモニーは、「自分勝手」からは決して生み出せないのです。

各学級では、実行委員やパートリーダー、指揮者や伴奏者を中心に練習に励んできました。時には意見の対立や葛藤もあったはずです。しかし生徒たちは対話を重ねる中で、「美しいハーモニーのために心を一つにする」という大切な学びを得てくれました。ばらばらだった歌声が、互いの音を聴き合い心を合わせることで一つの響きへ変わった経験こそ、最高の学びと言えます。

さて、11 月は「ふれあい月間」として、いじめなどの問題行動の未然防止に向けた取組を強化してまいります。いじめを防ぎ、誰もが安心できる学校を創るには、「自分の大切さ」と共に「他の人の大切さ」を互いに認め合うことが不可欠です。様々な個性をもつ一人一人が互いを尊重し合うことこそ、集団における「心のハーモニー」です。ふれあい月間中、本校では生活アンケートや教育相談の実施、道徳等の授業を通じた他者理解の推進など、いじめ防止に全校で取り組み、生徒の小さな変化も見逃さない体制を徹底してまいります。

生徒たちには、合唱コンクールで育んだ心のハーモニーを今後の学校生活に活かし、より素晴らしい学級・学年を築いていってほしいと願っております。保護者・地域の皆様には、今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

**圧巻の３年生学年合唱**



第３学年の生徒たちがステージ上で大地讃頌を学年合唱として披露してくれました。迫力ある歌声でした。

# オクラ日記 NO7 キャプテンとは・・・

副校長 本田 敏行

ラグビーという競技は、「グラウンド上の多様性」を絵に描いたようなスポーツです。身長 190cm・体重 110kg の人間と、165cm・70kg の人間が同じフィールドで本気で走り回るわけですから、チーム作りは多くの部員の中から得意分野を見極めていき、時には無理な要求もしなくてはいけない場面も生じてきます。そんな個性豊かな強者たちをまとめ上げ、心を一つにしようと奮闘するキャプテンだった私の「胃が痛む日常」を綴ってみました。

1．個性のダイバーシティ（という名の無法地帯）

ラグビーのポジションは、驚くほど性格が出ます。（当時のチーム状況ということでお許しください。）

- フォワード（前衛）： 体重 100kg 超の猛者たち。「肉を食べること」と「目の前の壁を粉砕すること」に快感を覚えるタイプ。話し合いの場でもだいたい声がデカイ。
- バックス（後衛）： 足が速く、とにかく目立ちたがり屋。「なぜパスを出してくれない！」とすぐスネる繊細な性格の持ち主。

キャプテンの仕事は、まず「前線で肉弾戦を楽しんでいる強者」と「後ろでステップを踏んで相手を抜き去ることに快感をもっている者」の心のかけ橋から始まります。ミーティングで「次の試合の方針」を話そうとしても、フォワードは「とりあえず突っ込めば勝てる。」と言い、バックスは「僕にボールを集めてくれればトライまでもっていける。」と根拠のないことに自信をもって言い出す始末。

2．「心を一つに」という名の難解なパズル

「 One for All, All for One（一人はみんなのために、みんなは一人のために）」という美しい言葉がありますが、試合前のミーティングでのリアルはこうです。

- キャプテン：「みんな！タックルされたら、味方が来るまで泥泥になりながら 0.5 秒でも長くボールをキープするんだ！」
- メンバーA：「あ、すみません、今日新しいスパイク履いてるんで汚したくないです。」
- メンバーB：「僕、相手の体格を見たら怖くなったんで、あえて倒された振りしていいですか？」

私の胃に、静かに穴が空く音が響きます。

個性を殺さずに生かすということは、「勝手気ままなプレーを許す」ことではありません。「自分勝手なワガママ」を「チームの武器」に変換する作業の一つなのです。

「足が速いけどパスを出さない者」には、「よし、お前はとにかく一番奥まで走れ！ボールは投げてやる！」と言い、「タックルは嫌いだが体が大きい者」には、「お前は立っているだけで相手の脅威になる！何も考えずに真っすぐ走れ！」と指示を出す。これこそが誰かのために自分は動くというリカバリーの精神です。

つまり、個性が強すぎるメンバーの適材適所を見抜き、一番輝けるポジションを与えていき、試合で気持ちよくプレーをさせる裏方こそがキャプテンだと思います。

3．ノーサイドの精神と、終わらないキャプテンの苦労

激しい試合が終わり、笛が鳴れば「ノーサイド」。敵も味方も関係なく称え合うのがラグビーの素晴らしい伝統です。相手を認め、現実を素直に受け止め、勝敗には腐らず前を向く姿勢が重要です。そして仲間を大切にすること。

ラグビーのキャプテンとは、試合中は体を張り、試合外では気を配り、個性の強すぎる仲間たちの「手綱」を握り続ける、報われることは少ないかもしれないが、しかし最も遣り甲斐のあるものだと今になってようやく気が付くことができました。

グラウンドでキャプテンが何か叫んでいたら、それは戦術の指示ではなく、「お願いだからみんな言うこと聞いてくれ！」という心の底からの叫びだと思ってください。